

援助からビジネスへ～支援から協働 <その3>

シリアで灌漑資材店

国際耕種とシリアとの関わりは深く、90年代から農業普及や研修といった分野において活動をおこなってきた。2005年からはJICAの技術協力プロジェクト「節水灌漑農業普及計画」を実施し、シリアでのドリップ灌漑やスプリンクラーといった近代的灌漑の導入、普及に深く関わってきた。今回は、これらの活動を通して得た知見から、今後のシリアでの活動の可能性を探っていきたい。

我々がシリアでの活動で痛感していることは、現場で実際に作業にあたる技能者の技術、意識の低さである。灌漑施設を例にとると、彼らは設計図どおりに配管できない、継手の接合がしっかりとおこなえない、水平がとれない、配管の台座などは専用の器具を用いずに、その辺に落ちているブロックなどで代用するなど、一見して「やっつけ仕事」だと分かる。その結果、通水直後から漏水していることが殆どである。我々の知る限り、シリアではこのような施工業者が大部分であるため、農家も配管から漏水するのは当たり前と思いついており、これがドリップやスプリンクラーといった灌漑資材への不信につながり、灌漑近代化を阻害する一因なのではないかと疑ってしまう。

では、「なぜこのような技能者ばかりなのか?..」と考えてみると、彼らはきちんとした技術を学んでいないこと、本当に良いもの(仕事)を知らないのではないかと、という考えに至る。シリアでは大学などへ進学する場合を除き、地方ではまだまだ子供は家業を継ぐのが一般的である。施工現場では子供が父親の仕事を手伝いながらウロチョロしていることも珍しくない。彼らは父親を手伝いながら一昔前の職人のように仕事を盗み、見よう見まねで技能者となっていくのだろう。何百年と続くシリアの伝統技術であればそれでも良いが、近代灌漑などの新しい技術、特に工業製品に対しては勘や経験だけではなく、き

ちんとした教育、基礎の理解は必要不可欠であると思う...と、このような事を考えつつも、おもに我々がおこなっている技術協力は政府対政府が基本のODAであり、彼らのような現場で仕事をする人間へ直接的に関与することは困難なのが実情である。

そこで、シリアの技術力向上のために、シリアの若い技能者を日本に派遣し、配管施工業者など実際に現場で作業をおこなっている町工場のような所である期間修行させた後、彼らを中心にシリアで灌漑資材店(工務店)を運営するという構想を検討している。彼らが若いうちに日本で仕事を覚えることにより、シリアの慣例や常識に漬かりきることなく、設計図通りに施工する、継手の接合はしっかりとおこなうといった技術面だけでなく、工期を守るといった日本では当然の「作業の心構え」をも体得することができる。そして、こういった心構えを持つ技能者がシリアに増えることは、シリアの産業にとっても非常に有益なことである。彼らがシリアで活躍することにより、他の業者も彼らと同レベルの質の仕事をする得なくなり、結果としてシリアの配管業界の技能者レベルは向上する。

実務レベルでの底上げが出来なければ、どんなに最先端の技術を導入しても信用性に乏しく定着しない。さらに、こういった実務レベルの技能者を育てるには政府間での援助よりも、民間レベルで「質の高い仕事をすれば儲かる」ということや「質の高い仕事とはどういうことなのか?」ということ伝える方が即効性があり、また良い結果が得られるように感じる。このように ODA では手が届きにくい、しかし国の発展のためには必要不可欠なニーズというものは、どの国にも、どの分野にもあるのではないだろうか。このような分野に目を向け利益追求のみではない、社会的意義を追求していく、という事も国際耕種の目指すビジネスのあり方なのかもしれない。



左: 台座の代わりにブロックを使用しているため耐久性が問題である。

中: ハイドラントの折れ曲がった所(パイプを接続する部分・バルブの真下部)に水圧計が設置されているため、水圧計がハイドラントの折れ曲がった部分に隠れて目盛が読めない。

右: 施工完了直後に漏水する。